OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	欲望の場所 : 浸透する「他者」
Author(s)	宮原, 曉
Citation	世界思想. 2015, 42, p. 23-28
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/100371
rights	©2015 Sekaishisosha, an imprint of Sekaishisosha-Kyogakusha Co., Ltd. All rights reserved.
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

欲望の場所
——浸透する「他者」

宮原曉

1. 欲望のパラドクス

「欲望」に限らず、一見語り尽くされた現象を再考する際、まず必要となるのは、その現象をめぐる言説のなかから本質的なパラドクスを探りあてることである。

ブライアン・ターナーは、女性の拒食症の根底に、「欲望」をめぐる言説が生み出す二重のパラドクスをみいだしている。身体社会学は、前期資本主義の禁欲や、消費主義文化の快楽主義といった支配的な言説のなかで「欲望」が規制され、捏造されることを説く。拒食症の患者は、そうした言説に抗う術として性欲を否定しながらも、消費主義文化の性倫理や女性の魅力の基準を身体のうちに招き入れる。また拒食症の患者は、フェミニズムや父権制に代わる母権制によって、身体を抑えようとするが、それらは精神—身体の二元論を再生産し、産業社会や消費社会の支配的言説と同様に、女性たちを私的感情の領域に囲い込むのに加担する。女性たちが身体を抑える手段として身体的な手法をとらざるを得ず、その結果、消費主義文化が予告したとおり、身体が優位に立つようになるのも、彼女たちが私的感情の領域に封じこめられるからである（Turner, 2008: 157）。

ターナーは、「欲望」とそれが生ずる場としての身体からの離脱を企てながらも、「欲望」の場としての身体に囲い込まれ、「欲望」を受け入れざるを得ない二重のパラドクスの解明に身体社会学の可能性をみいだそうとしている。しかし、このパラドクスの背後には、さらにもう一つ別のパラドクスが隠れている。精神と身体を区別する枠組みが文化的に構築されるとしながらも、それとは異なる次元で、自己の連続性が、精神の連続性（身体ではなく）として想定され続けるのである。

本稿の企ては、ブライアン・ターナーの身体社会学に対する一つのコメンタリーとして、従来、「欲望が生ずる場」とされてきた「自己」にわけいっていき、「欲望が生ずる場」とは異なる「自己」の姿をとらえようとする。そのうえで、言説が「欲望」を規制し、捏造するとされる局面で実際に生じることとは何か、拒食症患者の身体で生じていたこととは何かもあわせて問うものである。

2. 透明人間の「欲望」

ターナーによれば、「身体が自己の連続性をかたちづくる一要素だとする考え方は、ある個人がその個人であり続けるとの認識を、複数の他人が持続的に持ち続けるかどうかによるとする説の前に後退した」とされる（Turner, 2008: 35）。この結果、「自己」（identity）の連続性は、身体にではなく、精神の連続性に求められるようになるのだ。

だが、ここにも逆説がみられる。揺るぎない境界を持っているはずの「自己」は、にもかかわらず「他者」の認識に深く依存している。また、精神に向けられることになっていた「他者」による認識も、身体から目をそらすことはできないのだ。

人が単に衣服を着用するのではなく、なぜきらびやかに着飾ろうとするのかは、欲望の理論――衣服によって異性を魅了したり、同性に対して優越感を持とうとしたりする――というよりも、他者のまなざしに深く関係している。このことは、透明人間の欲望についての次のような思考実験を試みることで一層わかりやすくなる。

透明人間の肉体は、見ることができない（存在しないのではない）。「自己」が精神の連続性に依拠するとの前提にたつならば、透明人間の欲望は、普通の人と大差はない。事実、人は肉体が見えなければ、なんでも好きなことができる――透明人間は、そもそも自己の欲望の究極の姿であり、見えない身体を利用して、欲望を自由に発揮できると思われがちである。

しかし、「自己」へのまなざしが存在しないところでは、ナルシシズムも存在せず、「欲望」も意味を持たない。

「自己」が「欲望らしきもの」（それは確立した自己を前提とする）を持つのは、他者のまなざしあってのことである。そこで「自己」は、他者のまなざしによって加工されるが、多くの場合、それは物理的な身体に向けられる。「自己」の姿は、他者が「自己」の身体をどうとらえているかにかかっているのだ。

もちろん、「自己」のあり方は、「自己」の確立を強調する言説が支配的な場合と、他人への依存を許容する場合で大きく異なるだろうし、他者のまなざしへの感受性の違いによる

個人差もあろう。本稿では、自己がいかに文化的に構成されるかについてつぶさに検討を行っている余裕はなさそうであるが、精神と対立しない身体のあり方を検討することで、自己と欲望に関する新たな構図を描いてみたい。

3. 肌的身体

私たちが身体をイメージするとき、そのイメージは断片的で漠然としたものである場合が多い。杖や失った手足の感覚を持ち続けるなど、物理的な身体を越えて拡大することもあれば、逆にいくつかの臓器や背中などに感覚が及ばないこともある。

闘鶏場（フィリピン）。賭けの仲介人たちはいっせいに立ち上がり，視線をかわし，腕をふりかざしながら，大声で賭けの参加者を求める。この欲望の場所では，「他者」と「自己」がめまぐるしい速度で交換されるようにもみえる。（筆者撮影）

こうしたなかで「肌」は、身体そのものと同一視されやすい器官である。ここからは身体をもっぱら肌的にとらえるとしたらとの仮定の下に（もちろん、胃や心臓など肌以外にも身体のイメージを考えるうえで重要な器官はあるが）、議論をすすめていくことにしよう[1]。

身体を肌と同一視するならば、肌の状態は身体や心の状態を表す。肌は、審美の対象となるのみならず、その色、つや、はりが健康のバロメータともなる。

肌的な身体における「個」のあり方は、どのようなものだろうか。その感覚は、肌が接触するときの作用・反作用になぞらえることができる。肌がふれあうことを通して、「自己」と「他者」が相互に浸透しあう感覚、あるいは同時に、「自己」と「他者」が分節化する感覚を持つことができる[2]。こうして、肌は「自己」と「他者」が生ずる境界となるのだ。

「自己」と「他者」が生ずる境界としての「肌」は、レフ・ヴィゴツキーの言う「最近接発達の領域」に近い（高木、2001：106）。そこでの身体は、確固たる「自己」の拠り所というよりは、自己と社会が完全には分化していない、ホミ・バーバのコトバを借りれば、第三空間的な状態にあり（バーバ、2012）、半分節化された「自己」と「他者」が互いに浸

透しあっている。[3]

こうした「肌」的身体は、「自己」が「自己」として意識される以前の発達段階にのみみられるわけではなく、いわゆる自我が確立したと言われる段階にもみられる。こうして、「自己」と「他者」の相互浸透は、精神―身体二元論的な身体も含めて、多様な身体イメージのなかに確認できるのである。次に「自己」と「他者」が互いに浸透しあう場としての身体という見方が、「欲望」に関する従来の構図をどう変えるのか考えてみよう。

4.「他者」の欲望

「肌」的な身体イメージの下で、身体は「自己」が拠ってたつ場から、「自己」と「他者」が相互に浸透しあう場へと変わる。

精神と肉体を対置させる二元論の下で、欲望はあくまで「自己」の欲望であった。しかし、身体を「自己」であり、「他者」でもあるとみることで、欲望もまた半分節化された「自己」と「他者」が浸透しあうなかに、新たな意味を持つようになる。そこでの欲望は、「自己」にとって不足した何かを求めるといったものではなく、「他者」と「自己」の共存に向けた運動とでも言うべきものである。

こうして、衣服を身につけることは、衣服を身につけたいといった欲望でも、衣服をつけることを手段として性的欲望を満たそうとすることでもなく、着衣によって「他者」と「他者」の視線を身体のうちに招き入れることを意味する。

「他者」と「自己」を共存させる企ては、住居に居住すること、居住地に住むこと、アイデンティティを持つことにもみられるし、「所有」ということについても言えそうである。

四日谷は、建築と身体の関係について、ハイデガーに依拠しつつ、「身体は、それ自身の廻りの『生きられる空間』と密接に連関している」とともに、「空間のなかにあり、空間を占めている」と述べる（四日谷、2004: 142）。

肌や衣服がそうであるように、住居、居住地、アイデンティティも、「他者」と「自己」が浸透しあう場となる。これらは第二、第三の皮膚として、空間のなかにおかれることで「他者」以前の「他者」をひきうけ、「自己」を分節化することで空間（「他者」）を産出する。アイデンティティを持つこととは、内側の「自己」に由来するのではなく、外界の「他者」によって「自己」を定義することである。これは「所有」に関しても同じであり、モノの「所有」が生ずるのは、すでに分節化された外から内にモノがもたらされることを契機としている。何かを所有することと「欲望」は関連するものと考えられがちだが、このことは、一般に「欲望」とされる心理の根底に、「他者」と「自己」の相互浸透がみられる

ことを傍証していよう。言説が「欲望」を規制し、捏造するとされる局面で実際に生じることとは、このようなことなのである。

5. 女性と欲望

さて本稿を締めくくるにあたり、「他者」と「自己」の共存という視点から、女性をみてみよう。

ターナーが指摘するように、女性の性的な欲望は、生殖に果たす役割が男性とは異なるにもかかわらず、男性の欲望と同じものとして議論されることが多かった。これは、女性を自然や身体を特徴とする私的な領域にとどめておこうとする男性の意識の一つの表れでもある。

しかし、「欲望」を、「他者」と「自己」の共存に向けた運動として読みかえるならば、女性の性的な欲望は、懐胎を通して「他者」を「自己」に孕むことにこそ、その中心があると言えよう。高野和明の小説『K・Nの悲劇』で、主人公の女性は、堕胎を拒む一方で、別人格を憑依させる。女性の「欲望」（とされること）の根底にある「他者」と「自己」の共存への願望が、懐胎と憑依を通して巧みに表現されているのだ。

こうしたコンテクストで拒食症患者の女性の身体に生じていることとは、もはや明白である。彼女たちが奪われたのは、「他者」をとりこむ機会であった。消費主義文化の支配的な言説のなかで、私的感情の領域とそれにみあった欲望を割り当てられることで、彼女たちの「自己」は、際限のない膨張を強いられる。拒食症は、こうした言説に対する拒絶であり、「自己」の膨張と「他者」の不在の間で身体のバランスが崩れた結果なのだ。

「他者」と「自己」の分節化は、ちょうど呼吸のように、繊細なバランスのうえにたっている。このため、身体を規制する言説のいかんによって、「自己」が膨張したり、「他者」が過剰になったりする。

たとえばアイデンティティを過剰に摂取する場合や、移動にともなって「他者」が過剰に生み出される場合がある。そうした場合、「自己」は、身体から疎外されていく。

一方、「自己」が膨張し、「他者」が失われた場合、ナルシシズムに向かうではなく、外界との境界が消滅する。そこでは、欲望が無限に拡大されることもあれば、逆に、欲望を拒絶することもある。拒食症は、そうした場に生まれるのである。

「自己」と「他者」の間に、欲望の異なる側面をとらえようという本稿の企ては、たとえ話の類に過ぎないのかもしれない。しかし、「他者」と「自己」が相互に浸透しあう構図は、産業社会や消費文化主義の支配的言説によって「自己」

が「欲望」を規制され、あるいは捏造されることの二段構えの前提となる。「他者」と「自己」が未分化な状態から、まず「自己」が生み出される。そのうえで「自己」が支配的な言説をひきうけるのである。「欲望が生ずる」とされるのは、こうした局面なのである。

人間の基本的欲求が「基本的」とされてきたのは、「自己」が前提にされてきたからである。しかし、「自己」が「他者」と浸透しあう関係にあるのならば、基本的な欲求という考え方もまた再考されなければならないだろう。

注

(1) 身体の器官のなかでも、特に肌を強調する傾向がみられる社会の一つに、フィリピン社会がある。そこでは男性、特に若者の「かたい肌」や、女性や老人の「柔らかい肌」は、それぞれ身体や心の状態を表すとされる。

(2) フィリピンで乗り合いジープ等に乗っていると、隣りあった人の肌のはりを感じることがあるが、その感覚は、あたかも自分とその人を同時に感覚するものである。

(3) 自我を「主我」(I) と「客我」(me) に区分するが、そのひそみにならえば、フィリピン諸語の人称代名詞には、主格の (I) と (you) や、主格 (I) と対象格 (you) を一語で表現する代名詞が存在する。

参考文献

Turner, Bryan S. 2008 *The Body and Society* (Third Edition). Sage.
四日谷敬子　2004『建築の哲学――身体と空間の探究』世界思想社
高木光太郎　2001『ヴィゴツキーの方法――崩れと振動の心理学（身体とシステム）』金子書房
高野和明　2006『K・Nの悲劇』講談社
バーバ、ホミ・K　2012『文化の場所――ポストコロニアリズムの位相』法政大学出版局

（みやばら　ぎょう／大阪大学　社会人類学）